

るが、鳥を得ずしてむなしく歸りけるに、あかぬまといふ所にをし鳥一つがひゐたりけるを、ぐるりをもちていたりければ、あやまたす、おとりにあたりてけり、其をしをやがてそこにてとりかひて、ゑがらをばゑぶくろに入て家にかへりぬ、其次の夜の夢に、いとなまめきたる女のちいさやかななるまくらにきて、さめぐとなきゐたり、あやしくて何人のかくはなくぞと問ければ、きのふあかぬまにて、させるあやまりも侍らぬに、としごろのおとこをころし給へるかなしひにたへずして、參りてうれへ申也。此思ひによりて、わが身もながらへ侍まじき也とて、一首の歌をとなへてなくくさりにけり。

日ぐるればさそひし物をあかぬまのまこもがくれのひとりねぞうき、あはれにふしぎに思ふほどに、中一日ありて後ゑがらを見ければ、ゑぶくろにをしの妻とりのはらをおのがはしにてつきつらぬきて死にて有けり、これをみてかの馬兎やがてもとゞりを切て出家してけり、この所は前刑部大輔仲能朝臣が領になん侍也。

〔文恭院殿御實紀附錄三〕白鴛鷺。とて、鴛鷺の全身白毛にて、頭腋の邊などいさゝの赤黒の斑文ありて、嘴と足は淺紅色にて、美しく珍らかなるが有けり、享保の頃、鴛鷺の胸のあたり白毛にかはりたるに、白鴨の雌をかけ合せられしかば、其父鳥よりも白毛多くなりしを、再度白鴨雌をかけたりしどき、今之種とはなりぬるよし、有德院殿吉宗御好にて、この一種出來せしとぞ、其後年年に雛を生じ、内庭にも吹上の苑中にも數十羽飼せらる、人間になき種なれば、目撃せぬ者も多かり、春夏の交、雛を生るときは、餌飼番の者に至るまで嚴に命ぜられ、たまくおちたる鳥あれば、丸もきにしてひめ置る、日頃仰ありしは、鳥の爲に番の者等勞するもいかゞなれど、享保の御遺愛なれば、今もかく御扱ひありしと宣ひし、前にいへるごとく、雛を生せしとき、餌飼見守に命ぜられし者共には、歲抄に至りて御ねぎらひとして、物たまはる事なりとぞ。